藻類 Jpn. J. Phycol. (Sôrui) 38: 74–75, March 10, 1990

西澤一俊：第13回国際海藻シンポジウム見聞記

Kazutosi NISIZAWA: A record of the attendance at the XIII International Seaweed Symposium held in Canada

第13回国際海藻シンポジウム (XIII ISS) は，1989年8月13日から同18日まで6日間にわたり，カナダの Vancouver 市の British Columbia 大学で行われた。この国際会議は，筆者が以前にも本誌に紹介したように，海藻（設立当初は主にマクロ藻）に関する利用研究が主軸をなし，それに関連する基礎および応用の研究につき，各国の研究者が3年に一度会合し，業績発表を行い，討論し，また発表を希望しない者にもできるだけ多数参加してもらうよう広く呼びかけ，その回に出席した人はすべて次回のシンポジウムが行われるまで ISS の正会員とした。一方では，この会の運営や開催に積極的に関心をもつ10人前後の，各国から依頼選出された，国際諮問委員会 (International Advisory Committee, IAC) の委員が全体の世話をし，委員会の運営は，委員長と事務会計係を中心に，主にシンポジウム開催期間中に委員会の責任で行ってきたが，寄付金集めのことなどもあり，第9回 ISS (Santa Barbara) の頃から IAC が主体となって作った国際海藻協会 (International Seaweed Association, ISA) に一応全体会議の指導性を持たせることになった。

歴史的にみると，1952年夏にスコットランドの Edinburgh で第1回 ISS が開かれて以来，適当な国々で順番に3年に一回ということで開催され，日本では1971年の夏に札幌市で開かれた。今回はその13回目の催しという訳である。日本の委員は今回は筆者と東京水産大学の有賀祐勝教授の2人であったが，筆者は既に3回にわたって委員を務めたので，今回で辞任した。

委員会は会期中頻繁に行われ，ある時は研究発表の始まる前に1時間も協議し，夜も研究発表修了後ほとんど毎日のように行われ，ある時には昼食をしながら話し合ったこともあった。

今回は特に問題が多かった。ノルウェーの A. Jensen 教授の後を受けてカナダの J. McLachlan 教授が委員長になって運営されたが，次回の委員長の選出と開催国の決定に大分時間がかかったし，また，第9回 ISS (Santa Barbara) の時アメリカが主になって ISS より広い藻 (algae) 全体を対象とした国際学会を作るべきで，そうすれば ISS もその一部となり，藻類研究のまとまった国際学会がやれるという考えの下に，International Phycological Congress (IPC) を作り，1983年に Newfoundland で始めて以来，これも3年毎に開催され，1994年には中国で第5回 IPC を行う予定までに進行している。ISS の方は相変らず続けているので，ISS と IPC の両方に参加する人は2年続けて国際学会に出席しなくてはならない羽目になる。そこで，IPC が5回目（1994)以降4年おきに，ISS は14回目(1992)以降4年おきに開催すれば，恒久的に2年おきにいずれかが開催され，出席者にも便利になるという考え方があり，特にハワイ大学の Doty 教授は強い意見だが，ISS 側では，37年もの歴史があり，それが4年おきになると間が長過ぎるので，従来通りで良いという意見も強く，まだ合意に至っていない。

ISS の次回第14回は1992年フランスの Brittany の Brest と St. Malo の大学で行う予定に決まり，その次はとにかくチリーで行う予定となった。McLachlan 委員長の後任はチリーの B. Santelices 教授と決まった。また，IAC 委員の任期は基本的には9年間にしようということになった。

今回の講演件数は約210，ポスター発表は約25(日本における海藻製品の展示も含む)，特別講演1 (Donald Renn：海藻多糖を中心に生物工学で行う DNA 改変の原理の平易な解説）であった。昼間のミニシンポジウム（カッコ内は Convener）として，微細藻 (E. Laws), 養殖 (C. Yarish), 分類 (C. Bird), 生物活性物質 (Y. Shimizu), プロトプラスト (D. Cheney), 黄金色藻 (P. Harrison) などの6件が行われた。夜の部は筆者には不明。閉会式においては，研究利用面や運営などに功績のあった人々の表彰なども行われた。

全体の出席者数は，正確には筆者には不明であるが，400名近くはあったと思う。日本からは，同伴者を除いても約40名の人達が参加した。第9回の Santa Barbara や第11回の青島大会に次ぐ大勢の海外遠征ということになろう。そのうち半数に近い方々の研究発表があった。

会期中の中日の水曜日は休講で，ビクトリア見物，Vancouver 北海岸とライ島山，市内観光，船旅行，Royal Hudson 蒸気機関車 Squamish 旅行（筆者はこれに参加），徹夜の海藻採集など多種多様の小旅行が催された。また，2回ほど行われた夜の大宴会もあった。一つは市内にある科学博物館様の建物で行われたが，何といっても最後の夜の大学キャンパスの外れにある海に面した人類学博物館の裏庭で行われた鮭のバーベキューや民族踊りを混じえた夕食会は印象的であった。

（176 東京都練馬区向山3–10–4）